

2019 年春期

# 奈良学園公開文化講座

ガラス張りの天窓があるサンルームと食堂。

この部屋に武者小路実篤、小林秀雄、滝井孝作など多くの文人・画家が集い、  
芸術を語り人生を論じていました。

作家志賀直哉が昭和4年から9年間をすごした旧居でのこの集いが、  
人間的な交際の場や文化活動の核となり、「高畑サロン」と呼ばれるようになったのです。

このサロンがあった場所での公開講座です。

静かな時間の流れの中で、創造的な時間をお楽しみください。



- 定員 : 各回 30 名 (各回、事前申込先着順) ※定員になり次第、申込を締め切ります。
- 参加費 : 各回 350 円 (入館料込, 学校法人奈良学園設置校の在籍者本人及び教職員は無料です)
- 開催場所: 志賀直哉旧居 (奈良学園セミナーハウス)  
奈良市高畑町 1237-2 TEL 0742-26-6490
- 参加申込: 参加ご希望の方は、志賀直哉旧居までお問い合わせください。
- 主催 : 学校法人奈良学園、志賀直哉旧居 (奈良学園セミナーハウス)



Google Map



JR 奈良駅、近鉄奈良駅下車、(市内循環) 奈良交通バス  
約 10 分「破石町」バス停下車 東へ約 350m、北へ約 50m



志賀直哉旧居 (奈良学園セミナーハウス) 奈良市高畑町 1237-2/TEL:0742-26-6490

# 2019 年春期 奈良学園公開文化講座

## 《講座概要》

### 第 28 回 《奈良の志賀直哉》

2019 年 4 月 8 日 (月) 14:00~16:00

講師：大原荘司 奈良学園セミナーハウス志賀直哉旧居館長・奈良学園大学名誉教授

・大正末期から 13 年間に亘る志賀直哉の奈良での生活の有り様について話します。奈良の自然美を何よりも愛し、その中に溶け込む家庭生活の実践が、行動の人志賀直哉のモチーフであった。日記や小説の中に記述された具体的な奈良の地名や事柄を通じて、直哉の人間としての生き方の特徴を考えながら、旧居に薫習された志賀直哉の徳を味わう。

### 第 29 回 《歴史における日中関係（その 2）—反日の源泉を辿る》

2019 年 4 月 15 日 (月) 14:00~16:00

講師：木村優 奈良学園大学名誉教授・奈良女子大学名誉教授

・1931・9・18（柳条湖事件）を中国では日中戦争の開始日としているようです。この日付を大きく建物表面の壁に刻んだ博物館で、昨年筆者は高校生や大学生のグループや多くの市民を眼にした。この記念日の源泉には、琉球沖縄問題（1871）、台湾出兵（1874）など幾つかあった。我が国が旧満州に進出した理由・経緯を辿ってみたい。また、平頂山虐殺事件（1932・9・16）や 731 部隊なども紹介し、日本人が忘却または隠蔽したことなどに触れてみたい。

### 第 30 回 《土器（須恵器と埴輪）を分析して、古墳時代を再現する》

2019 年 5 月 13 日 (月) 14:00~16:00

講師：三辻利一 奈良教育大学名誉教授・鹿児島国際大学客員教授

・全国各地にある須恵器窯跡群から出土した須恵器片を大量に分析した結果、K-Ca、Rb-Sr の両分布図で地域差がある事が実証された。K、Ca、Rb、Sr は母岩の長石に含まれていた元素である。母岩（花崗岩類）も両分布図上で地域差があることも実証されている。この結果を踏まえて、須恵器産地推定法が開発された。この方法を使って、各地の古墳出土須恵器を大量に分析した結果、和泉陶邑産の須恵器が全国各地の古墳から出土することが示された。

### 第 31 回 《小学生と学ぶロボットプログラミング》

2019 年 6 月 15 日 (土) 14:00~16:00

講師：根岸章 奈良学園大学人間教育学部教授

・2020 年から小学校でプログラミングが必修化されます。ここで学ぶプログラミングは従来の「難しい」言語を用いたものではなく、「Scratch」のような、ビジュアル化されたプログラミング言語になります。本講座では、こうしたビジュアルプログラミング言語でロボットを動かします。小学生のお子さんと一緒に楽しんでください。合わせて、2018 年度に三郷町で行った取り組みについてもご紹介します。

### 第 32 回 《満州からの留日女学生たち》

2019 年 7 月 6 日 (土) 14:00~16:00

講師：竹田治美 奈良学園大学人間教育学部准教授

・近年、中国からの留学生が年々増加している。その背景には、文化・経済などの交流が盛んであるからだと思われる。しかし、近代において中国からの留学生、特に「満洲国」からの女学生は、なぜ留日の道を選んだのか。その背景も含めて具体的な実態を探ってみたい。

・女学生たちは十代後半から二十歳代の若さで、単身で日本に渡り、言葉や習慣、文化の異なる国で学び続ける困難は、簡単に想像できるものではない。まして時代は日本がアジアへの侵略を進めた時期と重なる。留日女学生たちはどのような思いを抱いていたのか。留学後の彼女たちの人生についても女性教育史の観点からその一端を窺ってみたい。